言葉によって

状況・文学＊

大江健三郎

言葉によって

状況・文学 ＊

大江健三郎

新潮社版

言葉(ことば)によって

一九七六年五月二五日発行
一九七六年一一月二〇日三刷

著者大江健三郎(おおえけんざぶろう)
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(03)二六六-五一一一
編集部(03)二六六-五四一一
振替東京四-八〇八
二光印刷 新宿加藤製本
定価九五〇円

© Kenzaburō Ōe
Printed in Japan 1976

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

言葉によって——状況・文学＊　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

＊プロローグ・同じ言葉によって　7
1　受け身はよくない（状況・一九七二）　11
2　言葉によって（講演）　31
3　力としての想像力（講演）　59
4　この一年、そして明日（状況・一九七四）　85
5　未来の文学者（文学）　109
6　ソルジェニーツィン『収容所群島』の構造（講演）　133
7　表現された子供（講演）　157
8　にせの言葉を拒否する（状況・一九七五）　193
9　全体を見る眼（講演）　211
10　諷刺、哄笑の想像力（文学）　239
11　道化と再生への想像力（文学）　263

言葉によって——状況・文学＊

*プロローグ・同じ言葉によって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

E・H・エリクソンが魯迅の一節に光をあてている。その照りかえしが、すでに三十年前に起こったことの、現在につながる意味を僕自身にあきらかにする。少年の魯迅が、死につつある父親に呼びかける。お父さん、お父さん、父親は激しい痛みを感じたように眼をあける。そしてわめかないでくれ、という。しかし少年は、父親が息をひきとるまで叫びつづけ、そして成人した魯迅は、それを自分が父親に対しておこなった最も重大な悪と感じる。

もしかしたら魯迅の浙江省とわが国の四国地方をつなぎえるのであるかもしれぬ伝承にしたがって、僕の父が死のうとしていた時にもまた、子供らは父の耳に向けて呼びかけるようにといわれた。姉と妹、弟が叫ぶ、お父さん、お父さん、そして僕は呼びかけることを拒む。母が僕を見る。その眼の記憶がいつまでも消えてゆかない。そして僕はいまエリクソンにみちびかれて、自分はあの時、死んでゆく父親の耳に向けて叫ばなかった少年の、社会・世界・宇宙への弁明のために、小説を書きつづけているのだと気がつく……

僕はこの光景について、かつて『遅れてきた青年』に書いたことがある。また『われらの狂気

を生き延びる道を教えよ』でブレイクの、Father! father! where are you going? O do not walk so fast. / Speak, father, speak to your little boy. / Or else I shall be lost. という詩句への偏愛を表現したこともある。しかもエリクソン、魯迅を経過するまで、あの光景から自分のにないこんだものを、自分の小説を書く行為の根源にすえてみることはなかった。

言葉によって、僕はつねに新しい経験へとつき出される。現在、この場所に刻印づけられながら、しかも時空を自由に横切るようにして。その経験がかさね塗りされることによって、僕をその中に置く言葉の流れが、全体性をかちとってゆくことを僕は志向する。その言葉の流れの構造は、ひとつの極に小説の言葉を置き、大きさにおいてそれに見合うような、小説よりほかのすべての言葉をもうひとつの極に置いて、そのふたつの極の間にダイナミックな関係がつねに活性化しているものだ。すくなくとも僕はそのような構造を夢想する。

ここに編年体のかたちで本にした文章は、僕が自分の仕事の中心に小説をすえながら、自分の言葉の流れのその構造を確かめるようにして書き、あるいは語った、文学、状況、そしてしばしばそれらをふたつ重ねるようにしての講演の記録である。僕はこの三種の文章が、統一的な同じ言葉によって書かれているように感じる。客観的にそれがそうであることを希望もする。かつて僕は自分の言葉を多様な方向におしひろげるようにして、『厳粛な綱渡り』以下の全エッセイ集の文章群を書いた。いまは言葉を収斂するようにしてこれらの文章を書いている。したがってかなりの時期をへだてながらにはなるが、この様式の本をつづけて刊行してゆくことを計画している。

1 受け身はよくない

受け身はよくない、という意味のことを、もっと独自の正確さをそなえた言葉によって、中野重治氏がいわれたように思う。受け身はよくない、受け身から出発しても、たしかに行動は始まるが、その人間の行動の全体に、どうしても欠落したところがでてしまう。現に、自分の行動の全体というものが、受け身で出発した人間には、把握しがたい。行動自体に受け身から始めたことによる歪みがつきまとう。能動的に、ごく小さいものであれ、人間が、かれ自身に自発するところの起点を、ひとつ据えてそこから出発する。ひとりの人間としての全体性をきずきあげてゆくところの行動は、そうでなくてはならない。もし受け身で出発してしまったなら、なんとかして困難な一点に踏みとどまって、大きい勢いをおし戻すようにして、能動的に躰の向きを立てておさねばならない。いかなる場合にも受け身は人間的によくない。

僕はそのように自分の言葉にかえて、けっして能動的でない自分の、むしろ受け身の積みかさなりのうちにある自分の、仕事について、日常生活について、またもっと広いところでの将来の展望について考えることがあった。もとより、自分の受け身の部分を根こそぎになしえたという

のではない。しかし僕はそこにひとつの自分の全体性への、検証の手だてをえてきたと思う。それはまた、僕が社会的なるものと出会う、そのたびごとに自分とそれとの関係を検証する手だてとして、むしろ僕にむけて突き出されてくるようでさえあった、結局は僕自身の意識がそれを突き出すものなのではあったが。

そしてその経験をかさねるにつれて、僕は戦後四半世紀の日本の進みようが、まさに受け身のものの積みかさねであることを、しだいに重く暗く認めてゆかぬわけにはいかなかったのである。それは、真に戦後的なるものは、能動的であり、それを打ち崩してゆくものは、日本人に受け身であることを余儀なくさせるものだとも認めることであった。戦後のはじまりにあたって能動的に構想された、新しい日本の全体性。それが四半世紀の日本の国際政治における選択の機会ごとに否定されてゆく。国内政治の日々の選択において、なしくずしに放棄されてゆく。その否定、放棄の行為が、それはそれなりに、日本人によって新たに獲得された能動性においてなされてきたか？　僕は、それがそうでないと観察するものである。日本人は、受け身で、寄りきられるようにして、その否定、放棄をおこなってきた。受け身であるゆえに、新しく全体性をそなえた日本の構想をかちえることはなかった。受け身で、寄りきられる者が、喜色満面のにやけづらをしている、というのは、無念な話ではあるが、今や戦後四半世紀をへて、日本人のいわゆる国民性の典型となったとすら、いわねばならぬだろう。しかしこの喜色満面の皮膚を一枚剝げば、その頭蓋の奥底には、新しい日本の全体性への構想など、いっさいしまいこまれてはいないのである。

具体的な体験にそくして語るならば、僕は日韓条約と沖縄返還協定の、まことに戦術も進み具合も、騒動も、騒動のおさまりようも、主役（かくれた主役は海の向うにいたが）までが臆面も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com